

仙覚の軌跡（四）

金沢氏と金沢文庫

仙覚は、『万葉集』の研究に功績を残したが、その学究を支援した存在と考えられるのが、鎌倉幕府で活躍した北条氏一門の金沢氏である。金沢氏は、幕府の要職を歴任した政治家であり、和漢の学問や文化に通じた教養人でもあった。金沢氏が別荘を構えた武蔵国久良岐郡六浦荘金沢郷（神奈川県横浜市）には、多くの典籍を保管した書庫が創設されて、金沢文庫と呼ばれていた。

〔史料 1〕 仙覚書状（蓬左文庫所蔵
金沢文庫本『斉民要術』紙背文書）
夏梨一裏・故柳両枝、
令進上候也、以此旨、可令
入見参給候、恐々謹言、
七月三日 仙覚（花押）
平岡右衛門尉殿
（礼紙ウハ書）
（切封墨引）
平岡右衛門尉殿
仙覚

仙覚の書状

金沢文庫には、【史料 1】に示した仙覚の書状が伝わっていた。なお、従来の翻刻には誤りがあるので、一部の字句を写真版で校訂した。この文書は、廃棄された裏面に『斉民要術』が書写されて現存したもので、文永 10 年（1273）7 月の書状と推定されている。仙覚が平岡氏に宛てて、夏梨一袋と古柳二本を進上して、主人に取り次ぐことを依頼した内容である。平岡氏は、金沢氏に仕える被官の一族だった。したがって、仙覚は、被官の平岡氏を通じて、金沢氏に品物を贈るような関係にある人物だったとみられる。また、こうした贈答品が、主君に対する献上物だったとすれば、金沢氏と仙覚との間に、主従関係が成立していた可能性も否定できないだろう。

仙覚の聖教目録

金沢文庫には、それ以外にも、仙覚の活動を物語る史料が残されている。【史料 2】は、金沢文庫が保管していた聖教の目録である。弘安 3 年（1280）7 月に仙覚が署名した奥書を確認できる。聖教とは、仏教の修法などの手順を記した文献である。仙覚は、金沢文庫で聖教を整理して、包紙に目録を付記したと考えられる。その奥書によれば、目録に掲げた聖教について、作法の基本を守って、修法を重ねることを記載している。仙覚は、金沢文庫の利用を認められて、仏典の管理などに関わっていたのである。こうした活動をみると、仙覚は金沢氏の文筆官僚だったと推定される。仙覚は、新釈迦堂を拠点とする供僧だったが、やがて金沢氏に仕える被官となったのだろう。また、従来の説によれば、仙覚の所見は、文永 10 年（1273）ごろで途絶えたというが、この史料によって、その活動年代が延長されることになる。仙覚は、少なくとも弘安 3 年（1280）、78 歳まで存命していたのである。

〔史料 2〕 聖教目録（金沢文庫文書）
（包紙）
□□□□ 或云、紺黒、
（祈）
□ 雨 対聞 別法
授与 軍茶 太
肝心集 雑記（梵字）（梵字）
（目録）
此裏紙之目六守根本、被重之次第私載之、
弘安三季七月十七日 仙覚

金沢氏の周辺

金沢氏の周辺には、文筆能力に秀でた人材が少なくなかった。たとえば、『徒然草』の著者である兼好法師も、金沢氏の被官だったことが実証されている。兼好の父親は、金沢氏に仕えて東国に下向した人物であり、その息子である兼好も、金沢氏の被官として、しばしば鎌倉や金沢郷に滞在していたという。仙覚は、兼好の出生前に活動した人物なので、直接的な交流は想定しがたいが、兼好の父親とは面識があったかもしれない。仙覚の場合は、『万葉集』の研究で名高い僧侶だったので、金沢氏の門客として迎えられて、金沢文庫を拠点にしていたのではないだろうか。

仙覚の後半生

このように、新釈迦堂の供僧だった仙覚は、北条氏一門の金沢氏とも密接な関係を結んでいた。仙覚は、金沢氏の蔵書を閲覧できる立場にあり、『万葉集』の研究を進める上でも、金沢文庫を活用していた可能性が高いだろう。鎌倉で新釈迦堂の供僧を務めた仙覚は、金沢氏の支援を受けて文筆活動を続けながら、晩年まで学究に対する情熱を燃やしていたと想察されるのである。